

(城西人文研究第 21 巻第 1 号)

## アンドレ・ジッドの方法 X ——『インモラリスト』——ソチの観点から(2)——

陶 山 嘯

『方法IX』でおおよそ次のような問題をのべた。『インモラリスト』の読者が奇妙に思うことが二つある。一つは作品の「序」、今一つは、冒頭の「内閣総理大臣 D・R 氏への手紙」である。

「序」には、不必要と思われるほど執拗な読者への要求がある。この物語は、異常な精神の病とみられるが、過去にありえたものだし、普遍的なものでもあると訴える。読者には不遜に感じられるほどだ。

次に総理大臣への手紙は、作品の小さな世界にはそぐわないようにみえる。主人公がコレージュ・ド・フランスの代講者にもなれる学者としても、単なるアカデミックなスノビズムをこえるものがある。たとえば、

——何によってミッシェルは、国家の役に立てるのでしょうか？

序にのべられる普遍化は、およそ主人公の世界とはかけ離れた「国家」的、あるいは社会的一般化におよぶと、作者は思っているようにみえる。

「序」と「手紙」、この二つの奇妙な印象は、いったい何なのだろうか。

この作品に関して、一般に、主人公の内面、作者の個人的苦悩のなかで考えられる。私の『インモラリスト』感も、過去にそのような観点からあらわした。しかし二つの奇異なもの、とりわけ「手紙」については、気になりながら等閑視してきた。だが、いくぶん観点をずらせば、とくにソチについてふれた後、『法王庁の抜け穴』の延長上でこの作品に光をあてれば、影の部分がむしろ明瞭な意味をもってうかびあがると思える。

さて、「IX」では、このような疑問にたいして、大方、次のような答えをだしてみた。

この作品には二つの「自然」がある。ひとつは、現実「在る自然」、今一つは「在りうる自然」。ミッシェルは病の回復にしたがい感覚を発見し、健康な肉体を願うなかで、過去の知識、思想、論理を否定する。「新しい人間」になろうとする。しかしこの新しい人間について彼は誤解する。その思想化、社会化を、自然と人間との調和のなかに見出そうとする。「在る自然」にそった、ごく常識的な自然観と誤解するのだ。しかし、ミッシェルのもとめた自然は、「在りうる自然」であった。それは、自己の所有の否定であり、同時に人間のつくった社会常識、道德の否定であり、それを論理づける文化、言語そのものの拒否である。全ての否定の結果、ミッシェルは、自己の存在理由、新しい論理を創らねばならない。

したがって、先の問いかけにたいする答えはこのようになるだろう。

作品の「序」では、ミッシェルの特異性が、世界の転倒をもくろむほどの意味をもつ新しい思想であるから、読者にその普遍性を執拗にうったえたといえる。また冒頭の手紙は、国家という近代ヨーロッパの象徴の転覆をもくろむ「背徳者」にふさわしいものだからだ。

この『インモラリスト』の序と手紙についての、私なりの解釈をさらに他の方法で、より明らかにしたい。

1992年から1993年にかけて、この作品の手書き原稿、いわゆるマニュスクリを読む機会を得た。パリ、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館（La Bibliothèque Sainte Geneviève）と同じ建物内にあるジャック・ドゥーセ図書館（Jacques Doucet）は、フランス現代文学のマニュスクリを多数蔵している。ジッドに関しては、レシ作品、『女の学校』、『法王庁の抜け穴』他、多数をもつ。『インモラリスト』については、ほぼ完全であり、プレイヤッド版『アンドレ・ジッド——レシ、ロマン、ソチ』にも一部収録されている。ただし、マニュスクリの貸出もコピーもゆるされておらず、館内で読む以外、調査の方

法はない。したがって私は、判読の難しい手書き原稿を充分時間をかけ、手書き原稿とテキストとの差異をほぼ完全にノートした。

そのノートから、『方法IX』について充分うらづける部分についてのべるとともに、手書き原稿とテキストとの差異の一部を紹介する。

## 1. マニュスクリ本体についてのジッドの序文

マニュスクリの冒頭、ジッド自身が加えた序のような文がある。これは、テキストには収録されていない。以下、仏文と訳をのせる。判読が難しいが、ほぼこの単語と決定できたものを  ，ほとんど判読できず、コンテキストのなかで決定したものを   とする。

L'immoraliste — vous voici le manuscrit — commença de se former en moi dès 96; mais je ne commençai de l'écrire que beaucoup plus tard.

(Impossible à présent de retrouver la date exacte.)

J'ai le plus grand mal à reprendre pied dans le réel et à résigner les théories de l'école.

(Je veux dire celles que faisaient les disciples de Mallarmé) qui tendaient à présenter la réalité comme une contingence accidentelle et à en vouloir échapper l'œuvre d'art.

On a pu dénoncer dans ce livre une influence de Nietzsche; mais je ne rencontrai Nietzsche qu'après que j'avais écrit déjà mon livre à moitié; et cette lecture me gêne plutôt qu' elle ne me secourt alors; elle me fit supprimer de ce livre certaines phrases dont l'affirmation me paraissait se rapprocher trop de l'auteur du Zarathustra.

Janvier 1918

André Gide.

## 『インモラリスト』草稿序文

ここにあなた方が手にする初草稿—『インモラリスト』は、1896年からあたため始めていたものだ。しかし、ずっと後にしか、私は書き出さなかった。（今日，その正確な日付は思い出せない）

現実の世界にしっかり地歩を占めることが、私にはとりわけ難しかった。あるエコール（象徴主義）の論理を放棄することにもとても私は苦労した。（それはマラルメの弟子がつくった論理を意味するのだが。）これらの論理は、現実を一時的でささいな出来事としてとらえ、現実から芸術作品をひき離そうとする。

また、この作品に、ニーチェの影響ありとあばくことはできる。しかし、私がニーチェに出会ったのは、すでに自分の作品の半分を書き終えてからだった。そして彼の本を読んだことは、当時、私の助けになるよりむしろ邪魔となった。そのため私は、『ツァラトゥストラ』の作者にあまり近づきすぎるように思えた思想をもつ、いくつかの文を作品から削除した。

1918年1月

アンドレ・ジッド

この序で作者は、象徴主義の影響をぬけだそうとしたことと、ニーチェの影響がないことを訴えている。この二つの影響否定は、すでに所所で言及されていることだが、ときにはむしろこれらの影響関係をジッドの作品に見出す評家も多かった。しかし、彼がこの作品で意図したことは、象徴主義が嫌った現実などというより、はるかにへだたった問題の中で「現実」を考えることだ。先に述べたように、現実と呼ばれる日常性、社会、文化そして自然の否定まで作中人物が語っているのだから、一象徴主義の影響を作者が否定しようとするのは当然である。また「新しい人間」の思想を主張するにあたって、たとえ似てはいても、ミッシェルあるいはメナルクがツァラトゥストラを嫌うことも当然だろう。あらゆる思想と論理を拒否した上で、新たな何かを創ろうとする作者

の意図からすれば、作品の一部分を削除するまでその影響をこばむだろう。

## 2. 作品の「序」と「内閣総理大臣への手紙」について

『方法IX』で言及した『インモラリスト』の序文 (Préface) は、マニュスクリにはない。初草稿では、この序文は必要ないとみなされたからだろうか？ また、「手紙」の「国家」的、社会的一般化について、マニュスクリにはどう記されているのだろうか？ この二点について、テキストと原稿とを比較しつつ考えてゆきたい。

はじめにテキスト全文 (プレイヤッド版)、次にそのテキストの行数により、マニュスクリとの違いを記す。

マニュスクリ→テキスト。

/×……/ : マニュスクリで線などにより消された文。黒くおおわれたものも、すかしてみることで再現した。

### 《テキスト》

#### *A MONSIEUR D. R. Président du Conseil*

Sidi b. M. 30 juillet 189.

1. Oui, tu le pensais bien: Michel nous a parlé, mon cher frère.
2. Le récit qu'il nous fit, le voici. Tu l'avais demandé; je te l'avais
3. promis; mais à l'instant de l'envoyer, j'hésite encore, et plus je le
4. relis et plus il me paraît affreux. Ah! que vas-tu penser de notre
5. ami? D'ailleurs qu'en pensé-je moi-même?... Le réproverons-
6. nous simplement, niant qu'on puisse tourner à bien des facultés
7. qui se manifestent cruelles? — Mais il en est plus d'un aujourd'hui,
8. je le crains, qui oserait en ce récit se reconnaître. Saura-t-on in-
9. venter l'emploi de tant d'intelligence et de force — ou refuser à tout

10. cela droit de cité?

11. En quoi Michel peut-il servir l'État? J'avoue que je l'ignore...

12. Il lui faut une occupation. La haute position que t'ont value tes

13. grands mérites, le pouvoir que tu tiens, permettront-ils de la trou-

14. ver? — Hâte-toi. Michel est dévoué: il l'est encore; il ne le sera bi-

15. entôt plus qu'à lui-même.

### 《マニュスクリ》

l.1-2 Ce que je t'adresse ici, mon cher frère, l'intime récit que Michel vient de nous faire.

→ Oui, tu le pensais bien: Michel nous a parlé, mon cher frère. Le récit qu'il nous fit, le voici.

テキストの「そう、兄上のおさしどおりでした」という書き出しは、ミッシェルの状況を調べるよう依頼したのが、ミッシェルの友人の兄(?)の大臣であることがまず明らかになり、言葉少なに主人公の社会的重要性をほのめかす。また、導入の文としてもマニュスクリより無理がなく、すぐに「ミッシェルは私たちに話しました」と続くことで、ミッシェルに焦点が直接ただちにあたる。最後の文「彼が私たちに語った話は、これです」は、簡潔かつ明解である。

l.2-12 ナシ。l.14 の la trouver? の後に移動。

l.12 situation où se sont placés

→ position que t'ont value

position の方が situation より具体的に公務員の地位を示すからか?

l.13 se permettront de trouver à quoi occuper notre ami

→ permettront-ils de la trouver

明らかに意味が違ふと思われる。

se permettre de (et infinitif):

Prendre la liberté de = s'aviser, oser. (Petit Robert)

permettre de (suivi de infinitif):

donner le moyen, l'occasion, la possibilité de. (Petit Robert)

l.14 テキスト l.2 から l.12 にあたる部分が, ここに移動。マニュスクリ全移動部分。

Je le souhaite. Il m'est dur de voir sans emploi tant d'intelligence et de force. Sous notre triste *république*, Notre *France* appauvrie, lassée, pleurerait moins ses diminutions d'énergie, si de chaque homme de valeur qu'*elle* pût posséder encore, *elle* faisait plus directement son redevable.

En quoi Michel peut-il servir l'Etat ? J'avoue que je l'ignore;  
/× mais / et c'est à toi de le trouver: j'estime que tes fonctions s'y obligent. Que si de telles énergies n'ont pas la raison d'être  
/× pour *elle* / en *l'Etat*, c'est que *l'Etat* n'a pas raison d'être pour elles. C'est par les forces dont

/× *elle* n'a (aura) su que faire /

*un Etat (la République)* n'a pas su se servir

/× qu'*un Etat* meurt / que périra la *République*, me disais-tu;  
je /× le / retrouve ta parole. Michel n'est pas seul, je crois, dont

cette confession soit l'histoire.

Hâte-toi; Michel est /× encore / dévoué; il l'est encore; mais /× dans peu de temps / bientôt il le sera peut-être plus qu'à lui-même

→テキスト l.2 から l.12。

### 《マニュスクリ和訳》

私は、そのことを願います。これほどの知性と力が使われないことを見るのは、私にはつらいことです。我があわれな共和国の下、衰えあきられた我がフランスも、もし国がまだ所有しうる価値ある人々から恩恵を、もっと直接にうけるならば、フランスの活力の減少をなげくことにはならないだろう。

どのようなことで、ミッシェルは国家に役立ちうるか？

私には、それがわからない。そしてあなたこそ、それを見出すことのできる人だ。あなたの地位がそれを可能にしようと私は思う。もしこのような活力がフランス国家において存在理由をもたないならば、それは、国家自体がそれらの活力にとって存在理由をもたないことになる。私は、あなたの言葉を思い出す。あなたの言ったように共和国が衰亡するのは、国家が使うことができなかった力によってである。このような告白が問題となる人は、ミッシェルが一人ではないだろう。

急いでください。ミッシェルは身をささげています。彼はまだそうしています。しかしやがて多分、自分自身にしかささげなくなるでしょう。

### 《テキスト和訳》

→あなたが望んでいたし、私の方も約束したが、しかしこれを送るときになって、私はまだ逡巡している。そして読みなおせば読みなおすほど、私にはこれがおそろしいものにみえる。ああ！ 私たちの友人についてあ



あなたは どう 思 っ か？ それ 以 上 に 私 自 身 どう 考 え て よ い の か？ …… 。 こ  
れ 何 だ か 恐 ろ し い か た ち で あ ら わ れ て い る 才 能 を 善 導 す る こ と を 拒 ん で ま  
で、 単 に 彼 を 非 難 す る だ け で よ い の だ ろ う か？ し か し 私 が お そ れ る こ と  
だ が、 こ の 物 語 に 自 己 を 見 出 す こ と に な る 人 が、 今 日、 何 人 か い る。 こ れ  
何 だ か 知 性 と 力 を ど う に か 使 う こ と が で き な い も の だ ろ う か。 …… あ る い  
は こ れ ら 全 て に 市 民 権 を 拒 む べ き な の か。 ど の よ う に し て ミ ッ シ ェ ル は 国  
家 に 役 に 立 ち う る の か？ 正 直 言 っ て 私 に は わ か ら な い …… 彼 に は 仕 事 が  
必 要 だ。

先 の 問 い かけ、 テ キ ス ト に は 序 文 が あ る の に、 マ ニ ュ ス ク リ に は な い 理 由、  
そ し て 「手 紙」 の 国 家 的、 社 会 的 一 般 化 に つ い て、 こ こ で さ ら に 考 え て み る。

マ ニ ュ ス ク リ と テ キ ス ト は、 こ こ で は ず い ぶ ん 違 う。 同 一 文 (下 線 部) は 8  
文 ほ ど で あ る。 さ ら に 内 容 と し て は、 こ の 二 文 の 焦 点 の あ て 方 が 違 う。

マ ニ ュ ス ク リ は、 ミ ッ シ ェ ル の 行 為 と 価 値 の 是 非 を 問 う 以 前 に、 彼 の 能 力 が  
国 家 に 役 立 ち 得 る か を 問 う て い る。 マ ニ ュ ス ク リ に あ ら わ れ た 「国 家」 に か か  
わ る 語 と テ キ ス ト に あ ら わ れ た そ れ と を 比 較 し て み よ う。 順 に 列 挙 す る。

## 《マニユスクリ》

notre triste république (共和国)

notre France appauvrie (フランス)

elle (= la France, la République)

l'Etat (国家)

tes fonctions (役職)

l'Etat

l'Etat

elle (= la République)

un Etat (× la République)

la République

## 《テキスト》

droit de cité（市民権）

l'Etat

une occupation（職務）

la haute position（公務員役職）

以上に明らかなように、マニユスクリは、ミッシェルと国家との関わりを述べることに焦点をあてている。ミッシェルの個人的行為の是非に関して話者の逡巡は一切なく、ひたすら彼の知性と能力を国家フランス共和国でいかに役立てられるか、そしてもしそれを役立てられなかったら、国家の存亡にかかわるとまでいう。作品の冒頭すでに、ジッドは、「国家の転覆をもくろむ」背徳者と主人公を想っていたと思われる。

たいしてテキストでは、ミッシェルの是非を問う倫理的問題に焦点がおかれる。「手紙」は、まずその是非を決定することをさける。その後、「この物語に自己を見出す人が何人もいる」故、この物語の客観性、普遍性を強調。最後に、「市民権」という個人にかかわりつつ、彼の社会性、一般性をあらわす語がでてきて、はじめて、「国家」に役立ちうるかという問いかけとなる。

当初、作者は、自分がぜがひでも語りたいこの物語の主題を性急に書き進めた。しかし、物語の内容、一考古学者の青年が妻とのかかわりのなかで、病の回復をけいきとして、新しい自己、インモラリズムを発見するという内容が、その追いもとめる先に、既制の社会全ての転倒をかいま見ているということまで、読者の理解をうるには、多分、性急すぎると思ったに違いない。物語にそった論理的構成により、ミッシェルの個人的倫理的問題→その普遍化→社会という構成により、読者にゆっくりと訴え、さらにテキストの「序文」をそえることで、充分、作品の意味を読者に理解されたいと願ったのだろう。あるいは作者自身、自己の自負心にとまどいを覚えたのかも知れない。いずれにしろ、テキストのみを通して、「方法IX」で私の追った結論が、いくぶんかはこれで支えられるだろう。

「方法X」，ソチの延長上よりみたインモラリストについてはここでおわるが，インモラリストをはじめとするマニュスクリについては端緒についたばかりで，多くの時間をそれについやすことになるだろう。

なお，全作品のマニュスクリの探索の許可を与えていただいた，ジッド氏御令嬢，カトリーヌ・ジッド夫人に心から感謝するとともに，心より指導を下さったジャック・ドゥーセ館長シャポン氏，パリ大学名誉教授ギュイヤール氏に感謝する。

Je remercie à Madame C. Gide, qui m'a autorisé de scrupter les manuscrits de Monsieur Gide. et remercie aussi à Monsieur Chapon et Monsieur Guyard qui m'ont aidé à poursuivre mes études sur les manuscrits.